様式1

令和5年度　学校評価表

学校教育目標	自ら伸びる　みんなとつながる　三幸っ子の育成

a　ミッション	小中連携教育を基盤としたカリキュラム・マネジメントの推進による主体性・表現力の育成	a　ビジョン	・夢や希望がある……目標に向けひたむきな学校　・一丸となる…組織的に取り組む学校 ・積み重ねがある……丁寧に実践を重ねる学校

尾道市立三幸小学校

評価計画						自己評価					学校関係者評価				改善計画
	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月 g 達成値	1月 g 達成値	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価 イ	ロ	ハ	l コメント	m 改善案
予測不能な社会を生き抜く児童の育成	確かな学力の向上 「社会の中で生きて働く資質・能力の育成」	○「知識・技能」「表現力」「主体性・協働性」の着実な向上 （着実に基礎学力を身に着け、自分の考えを持ち、友達と協働して粘り強く課題に立ち向かう姿） ○15歳で目指す姿を意識したカリキュラム・マネジメントの推進 （学びをつなぎ、自ら探求しようとする姿）	○授業改善 ・算数科において、ICT機器を活用した自力解決支援・共有機能による交流の充実・学びのファシリテートを意識した授業改善によって、主体性・表現力を育む ・タブレット研修の実施 （実践内容の交流、新たな活用法の紹介等、年に８回以上）	○標準学力調査（算数科）で全国平均比100%以上 （１・２学期は、算数科学期末テスト）	標準学力調査（算数科）全国平均比100% 算数科学期末テスト通過率83%	83%	算数科テスト 82% 標準学力調査 96.4%	98%	B	算数科テストについては、目標値83%に対して達成値約83%であり、目標を達成することができた。標準学力調査については、目標値全国平均比100%に対して達成値96.4%で目標を達成できず、総合達成度は約98%であり、目標を達成することができなかった。本年度取り組んできた、算数科において、ICT機器を活用した自力解決支援・共有機能による交流の充実・学びのファシリテートを意識した授業改善について、一定の成果があった一方で、標準学力調査では、「活用」は全国平均を上回ったものの、「基礎」は全国平均を下回っていた。 課題としては、学力の定着が不十分な児童が一定数（平均通過率60%未満の児童の割合約13%）いること、「活用」と比べて「基礎」の定着が不十分であることがある。基礎基本の学力のより一層の定着を図るために、学校全体で統一した教材に取り組むこと、家庭学習の内容について精査する必要がある。	3			児童一人一人への対応は、なかなか難しいと思います。児童の能力・特性に合った対応が必要だと思います。 「学びをつなぐことの具体とよさを実感させる必要がある」本当にその通りだと思います。なぜ、これを学習するのかがわかってくると意欲も変わってくるので、大切にしてください。	改善に向けて次の２点に取り組む。 １点目は、基礎基本の学力のより一層の定着を図るために、eライブラリ・MEXCBTのより一層の活用することである。これまでも、取り組んでいたが、特にMEXCBTは、学力テストを意識した活用が中心で日常的な活用まではできていなかった。さらに活用頻度を高めるために、「Googleサイト」という機能を活用して、教職員だけのリンク集を作り、学習アプリやツールへのアクセスをスムーズにしたり、新たによい機能が出てきたときに共有しやすくしたりする。 ２点目は、学校全体で統一した教材に取り組むことや、家庭学習の内容についてに取り組むことである。特に算数科において、下学年の内容も含めた基礎基本となる内容を定着できる教材を選定、活用し、家庭学習や帯タイムを充実させる。 これまでの取組も継続させることによって、更なる学力の向上に取り組む。
			○学びに向かう意識のさらなる向上 ・振り返りの徹底と充実 ・振り返り評価基準の活用 ○教科横断的なカリキュラムの実践 ・言語能力、情報活用能力、課題発見・解決能力を活用したカリキュラムの作成	○算数科単元末に、視点に沿って、生活場面や他教科・領域等と学習をつなぐことができた児童 （児童記述・行動観察） ○教科横断を意識した授業についての意識調査で「学びをつなぐことができた」と答える児童 （児童アンケート）	82%	79%	82%	100%	A	目標値82%に対して、達成値は82%であった。9月から１２月は「学びをつなぐことができた」と答えた児童が平均して８０%を超えており、これまでの学習を振り返り、学んだことと他教科や生活場面とのつながりを意識して振り返る児童が増えてきている。課題解決する際のキーワードを板書し価値づけるとともに、問い直しながら思考させたり、これまでの学習と関連付けたりしていくことで授業終末の振り返りが充実してきた。一方で、教師側からみた授業後の児童の振り返りの記述と児童自身が感じている児童アンケートでは毎回１０%程度感じ方に差が見られる。授業の感想を書くことに留まる児童も一定数いることから、学びをつなぐことの具体とよさを実感させる必要がある。					改善に向けて、次の２点に取り組む。 １点目は、授業の中で、育成を目指す資質・能力と振り返りで期待する記述を明確にし、授業改善に努めることである。児童が、振り返りにおいて、わかったこと、自分の変化・成長、新たな疑問、今日の学びのつながりなど具体的に振り返られるよう、振り返りの評価基準を再度見直すと共に、授業における導入、板書、問い、学習活動等を精査する。また、振り返りを共有する場面を設けて、個人で学びを振り返ることに加え、他者がどのようなことを学んだのか知る機会をもち、多面的・多角的に捉えさせることで、よりよい表現に高めていけるようにする。振り返りを書くことに難しさを感じている児童には、学年に応じて振り返りシート等を工夫する。 ２点目は、学びをつなぐことの有用感を実感できる場を設けることである。他教科との関連、学びと地域社会との繋がりを実感できる場を設けることで、学びをつなぐことをのよさを実感させる。学びがどのようにつながり、自分達にどのような力がついているのか、教師が働きかけたり、カリキュラムマップを用いて児童自身が気付いたりする中で、児童の主体的な学びに繋げていくようにする。
	豊かな心の育成 「互いを認め、よりよく関わり合う心の育成」	○自己肯定感を高め、お互いを大切にする学級集団づくり	○自己肯定感を高め、仲間意識を育てる場の設定 ・学級活動におけるライフスキル教育の実施（学期１回以上） ・構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングの実施（学期１回以上） ・SCと児童との個別面談、教員への教育相談、児童理解研修 ○全員が認められる機会の充実 ・誕生日集会 ・ありがとう週間 ・学級会の質の向上 ・作品紹介や発表の場の設定 ○人の役に立つことが実感できる場の充実 ・係活動 ・わくわくボランティア	○生活点検の「学校が楽しい」の項目で肯定的に答える児童（毎月） ○道徳アンケートの「自分にはよいところがあるの項目で肯定的に答える児童（６月・１月） ○安心して学校に通わせている（保護者アンケート）（７・１２月）	87%	92%	88%	106%	A	「学校が楽しい」と生活点検で答えた児童の割合は、88%と目標値を上回った。しかし、7月よりも肯定的な評価をしている児童が減っている。低学年を中心に友達が「注意を聞いてくれない。」「コソコソ話をされているようだ。」「少しのことで手を出してくる。」など友達との関わり方を悩んでいる児童が多いことが分かった。 1月の道徳アンケートの結果で「自分にはよいところがある」に肯定的な評価をした児童は低学年88%、中学年75%、高学年72%であった。中学年では、日常的な生徒指導に加えSSWによるソーシャルスキルを行ったことが自己肯定感の向上に役立った。 12月に行った保護者アンケートによると、「安心して児童を学校に通わせている」と肯定的評価をした家庭は97%であった。保護者の願いや思いを汲んでほしいという声があったので、保護者に寄り添った対応を心掛けていく。	3			児童は、小学校の時に先生と1対1で話をした時に状況などを将来に渡って覚えていることがあります。保護者の方には見えないこの様な機会を数多く持って欲しいと思います。 安心して学校に通わせていると肯定的に評価している家庭が多いということは、先生方の関わり、対応の良さが感じられます。また、自己肯定感の向上に向けて、生徒指導やSSWによるソーシャルスキルトレーニングを引き続き行って欲しいと思います。	今後も、児童の関わり合う心の育成のために児童や保護者からの声を丁寧に聞き取っていく。特に生活点検では、アンケート後すぐに児童へ聞き取りを行う。そのために、アンケート実施日後ペア学年でアンケートの進捗状況を報告し合うことにより、迅速で細やかな対応ができるようにしていく。 また、友達とよりよく関わり合う心やスキルを育成するために学期に１回以上設定しているライフスキル教育を必ず実行していく。そのために、シラバスや年間指導計画で明確に位置づけた。どの教員も発達段階に応じた人間関係を構築できるように学校全体で進めていく。
	健やかな体の育成 「目標へのチャレンジによる気力・体力の向上」	○体力・運動能力の向上 （運動に親しみ、自ら目標を立て実現しようとする姿）	○授業改善 ・準備運動に柔軟運動を毎回実施する。 ・三幸サーキットを授業内容に即して効果的に毎回実施する。 ○業間体育 ・「１００周マラソン」で毎回５周走りきることを徹底する。 ・第２・第４水曜日は持久力を高める全校運動（全校遊び）を実施する。	○全学年１２月までに新体力テストを再度行う。握力・長座体前屈・２０mシャトルランの６項目で全国平均以上	全国平均値100%以上	91%	99%	95%	B	新体力テストの記録を令和元年度の全国平均と比較し、「握力」「長座体前屈」「２０mシャトルラン」で男女別６項目の全国平均値以上を目指して取り組んだ。第1回目（7月実施）の達成率は、91.3%であった。項目別の達成率は「握力」が92%「長座体前屈」が94%「２０mシャトルラン」が88%であった。結果分析・要因・評価と今後の取組を考える中で、児童が常に自己目標に対する認識を高め、目的意識を持って取り組むことを大切にした。併せて、柔軟運動は授業で毎回行い、生活振り返り表の項目にも取り入れることで、習慣化させた。身体の可動域が広がり、運動能力の向上と同時に、怪我の未然防止にも繋がった。怪我で保健室に来た児童は前年度比約25件減であったことも取組の成果と考えられる。また、職員研修の成果を児童の指導に生かし、優れた実践をもつ指導者を招聘するなど、児童にトップイメージを持たせた。業間体育の継続的実施、マラソン大会やストレッチ、外遊びを通じて児童の体力増進を図った結果、第2回目（12月実施）の達成率は98.6%と前回比7.3%伸びた。長座体前屈は106%、シャトルランは102%であったが、握力は88%の達成率に留まった。	3			ほぼ目標値に達しているので、７月に実施した結果を踏まえて継続してください。 柔軟運動を毎回行うことで、運動能力の向上と同時に、怪我の防止にもつながっていて、柔軟運動の必要性と習慣化の大切さを感じられました。	児童に具体的な目的意識をもたせること、児童が自己の体力の伸びを視覚的に感じ取ることで体力をはじめ健康の保持増進に対する意欲を高めること、児童の実態に合った効果的な柔軟運動を考え実施していくこと、家庭と連携し学校の取組との相乗効果を図ること、柔軟運動を習慣化して行ったことで怪我が減少したことなど取組に対する具体的な結果を児童に示すことで意欲を高めること、教職員の指導技術を高めるために体力向上推進リーダーを中心に研修を深めていくことである。 また、今年度の評価指標を見直しを含めた改善を行う。今現在の体力テストの比較が令和元年度のデータであることから、児童の実態に即したものかどうか、再検証を行う。過去５年間のデータの平均値を出して比べたり、学年や個々の児童の経年の伸びを基に評価したりすることでより実態に即したものとなるようにするなど、幅広く改善案を考え、取組・評価・改善を継続的に進めることで児童の体力向上を図っていく。
	子供と向き合う時間の確保 「働き方改革の推進」	○危機意識を持ち、知恵を出し合い、よりよいものを求め続ける教職員 （常によりよいものを求め続ける教職員の姿）	○業務改善の推進による子供と向き合う時間の確保 ・月１回の業務改善協議会実施 （働き方改革への意識改革） ・定時退校日完全実施。	○時間外在校等時間の月45時間以内の教職員60%	60%	50%	64%	107%	A	４～７月と８～１月の時間外在校等時間の達成数は50%と73.5%で平均64.1%であり、目標値に対する年間達成率は106.8%であった。長期休業中に業務を集中させ、部内で業務の進捗状況を確認するなど、主任・主事を中心にタイムマネジメントが進んだことも一因であると考える。さらに、２学期後半から、特別時程（早時程）を月２回設定し、放課後の時間を成績等の業務に充てるようにしたことも達成率を上げる要因になったと考える。また、毎月１回、業務改善会議を行い、全員で業務改善に対し意識を高くもつようにしていることも良かったと考える。	3			毎月１回の業務改善会議は、大変な方法だと思います。児童一人一人への思いを大切にし、継続して欲しいと思います。 特別時程の設定や業務改善会議を行うだけでなく、それに伴い、職員自身の意識が変わったことが、すばらしいと思います。また、今までやっていたからこれからも行うのではなく、検討しながら行っていくという姿勢が良いと思います。	今後も、年度末まで特別時程を設定しながら在校時間内にできるだけ業務を済ませ、持ち帰りが減るようにしていく。また、６月から行っている毎朝の退勤時刻の申告は引き続き行い、主任・主事を中心にタイムマネジメントを進めていく。さらに、「チーム三幸」として支え助け合いながら業務を行い、皆で声を掛け合い、常によりよいものを求める教職員集団を目指していく。

【自己評価　評価】
A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100
C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60

【外部評価】　イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。　ハ：わからない。